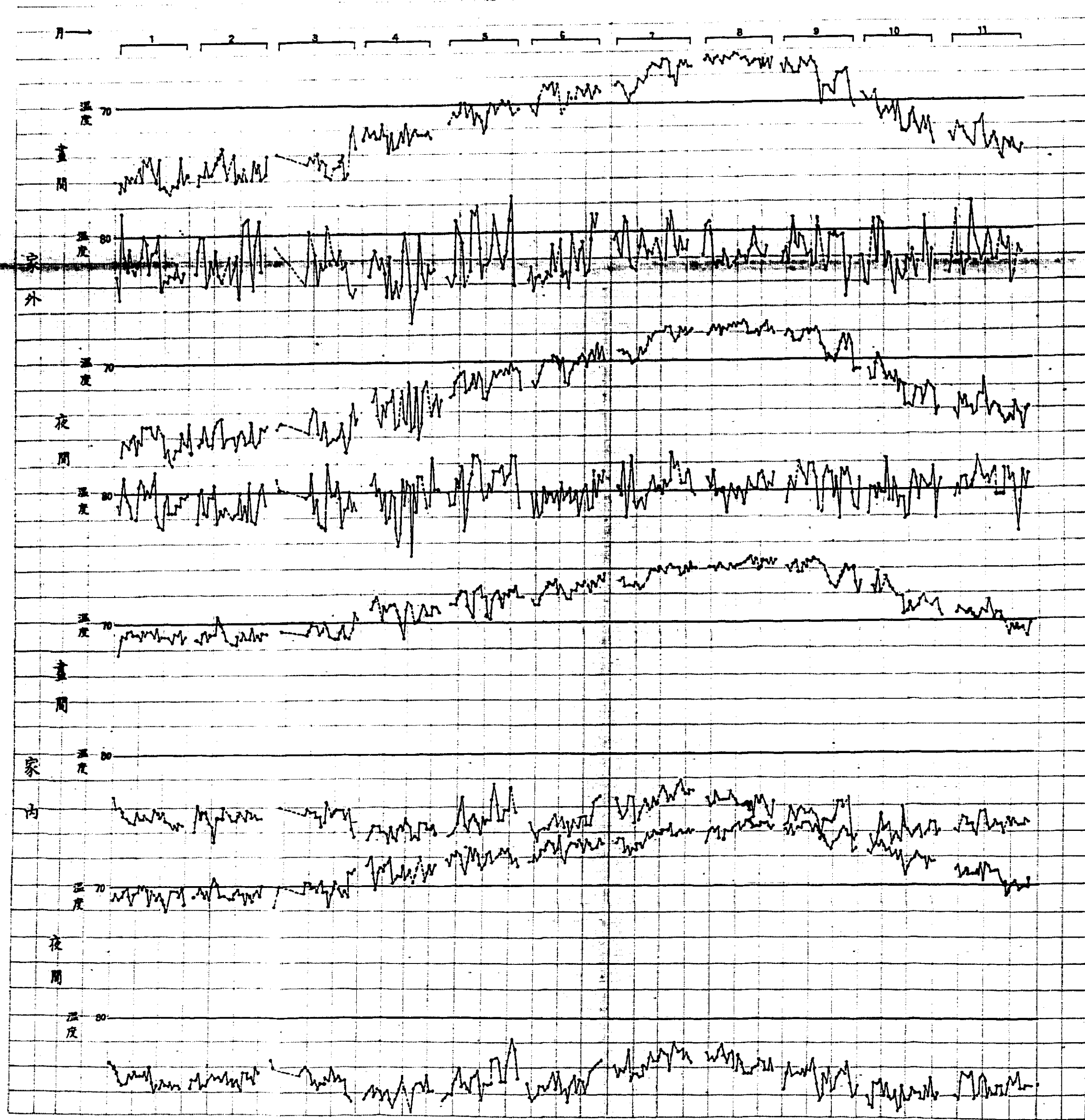
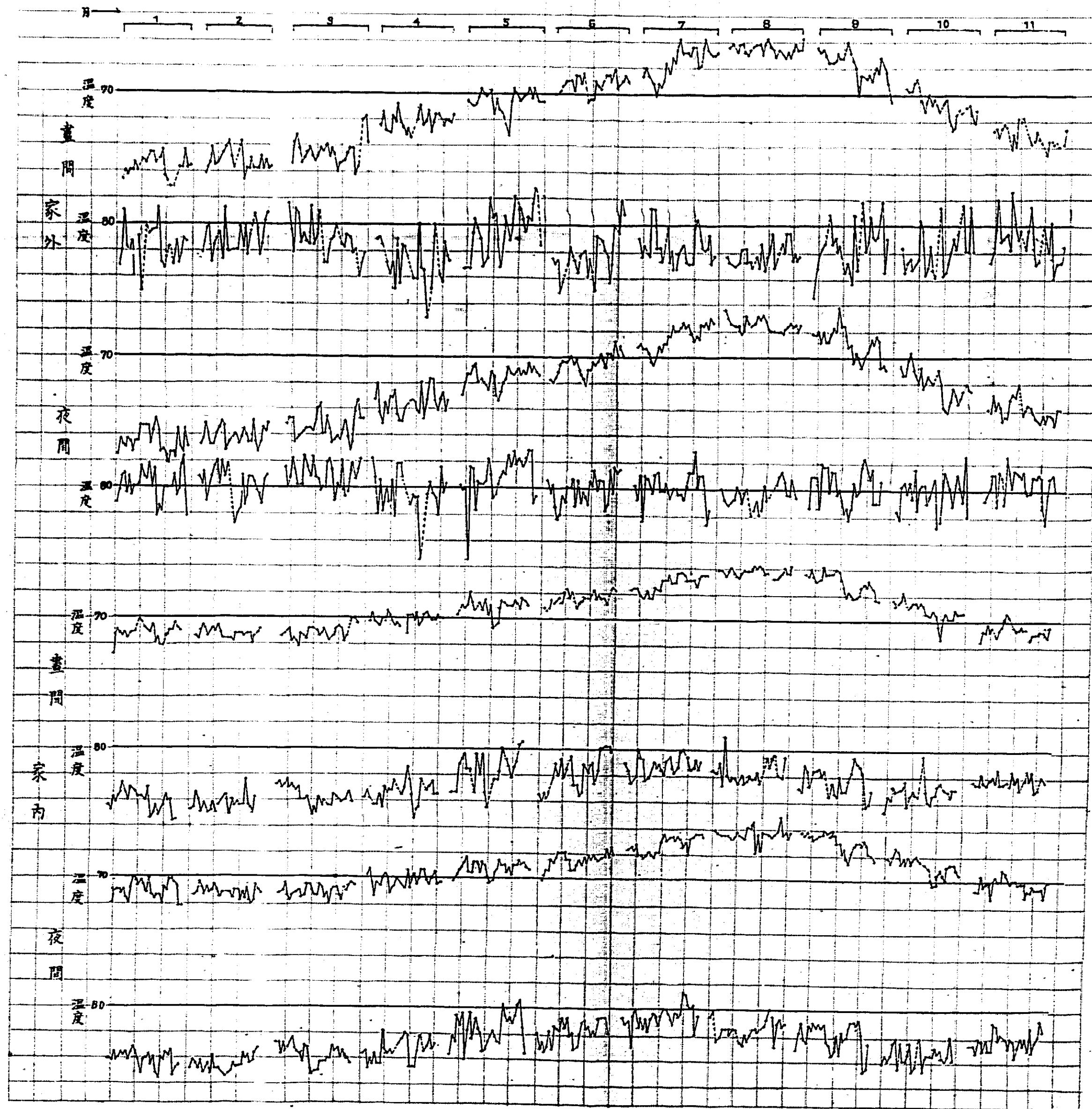


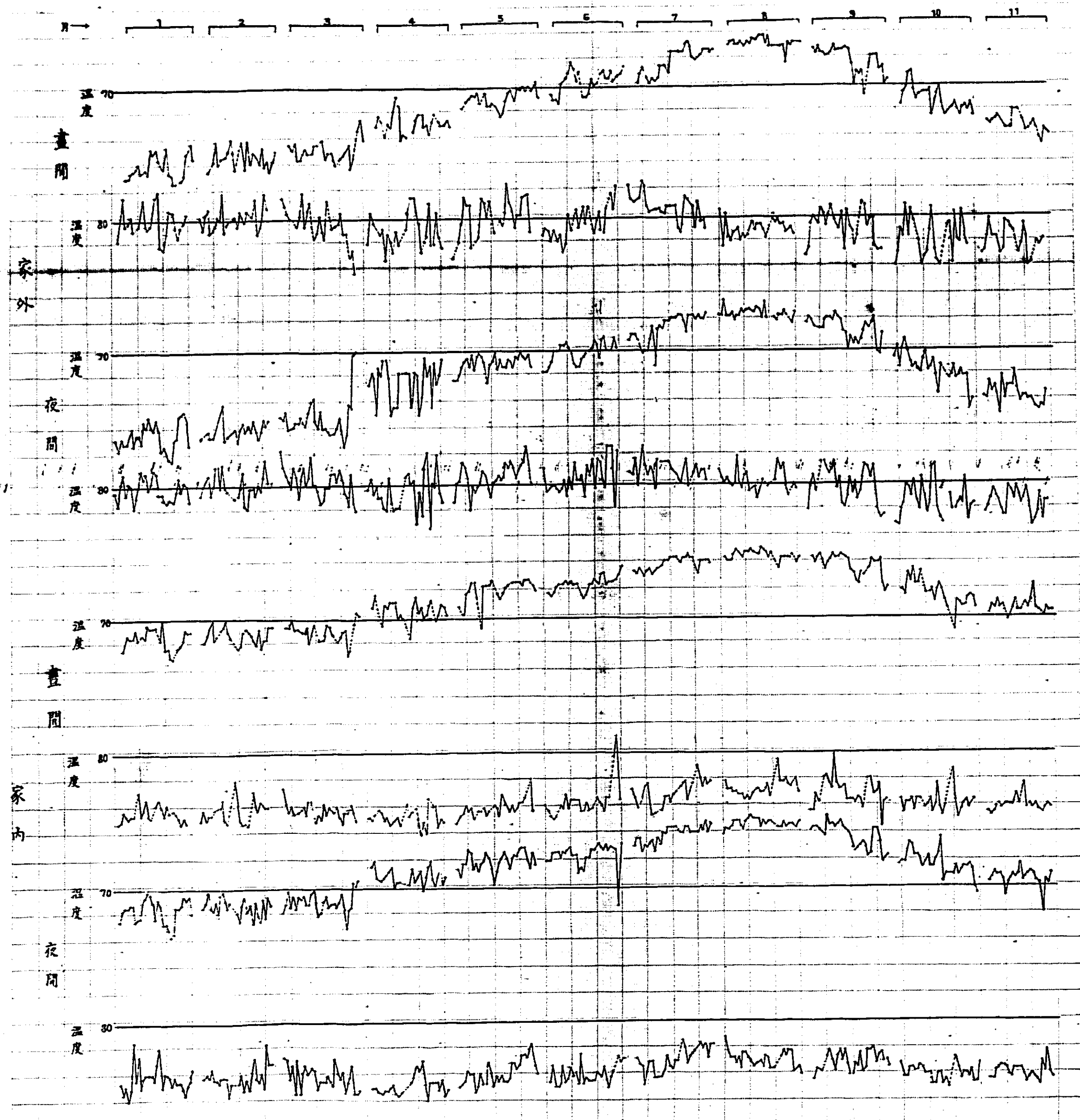
M.工場

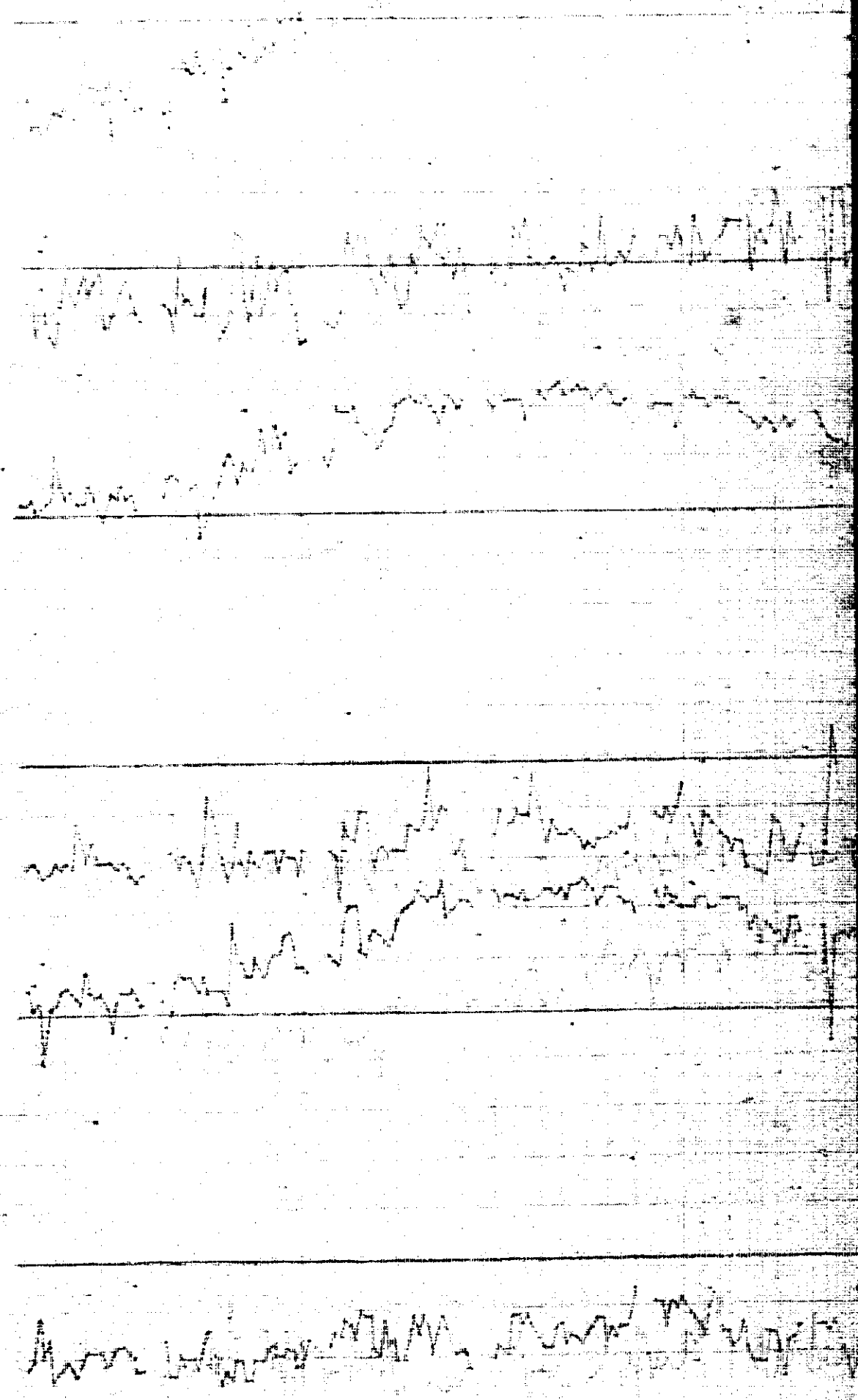


T.S. 工場



H.工場





七、榮 養

主 食 物

各工場に付て其の間、患者の發生數に差異の存することは前項に於て之れを述べた通りで、四工場に付て見ればH工場及T.S.工場が他の二工場に比べて其の患者の發生が最も多いのであるが、茲に其の榮養の状態による影響又は關係を知る爲め、前掲のK工場、M工場、T.S.工場、H工場及之れと他に尙一つのH.K.工場とを加へて其の榮養状態を知る爲めに別表食盡表に付て見れば、日一人當り、一年平均主食物の食盡量はH.K.工場に於て最も多く、矢張りH工場は最も低くあつて前掲患者の最多發工場と相一致するのを見るが、其の同じく多發する順位に屬するT.S.工場に於ては、却つて食盡量は一年平均だけでは、H工場の例を見て、一部の理由とはなるが、全くすべし、患者の發生と一致するものとも考へられぬと思ふ。

そこで各月別に依る状態は如何であるかと云ふことを見ると、其の各工場月別平均に於て、一月に於ては四・三五合であつたものが、六月に於ては四・〇〇合となり七月、八月と漸次減少して行き、八月を最低として再び漸次回復して遂に十二月に於て四・二九合となるのを見る。

各工場別月別一人當り主要食盡表(單位合) (其 一)

K.	H.	H.K.	一 月		二 月		三 月		四 月		五 月		六 月		七 月		八 月		
			米	麥	計	米	麥	計	米	麥	計	米	麥	計	米	麥	計	米	麥
三・九三	三・九三	三・九三	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六
三・九三	三・九三	三・九三	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六
三・九三	三・九三	三・九三	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六
三・九三	三・九三	三・九三	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六
三・九三	三・九三	三・九三	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六
三・九三	三・九三	三・九三	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六
三・九三	三・九三	三・九三	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六
三・九三	三・九三	三・九三	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六
三・九三	三・九三	三・九三	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六	四・〇六

平均	T.S	M.	一月		二月		三月		四月		五月		六月		七月	
			米	麥	計	米	麥	計	米	麥	計	米	麥	計	米	麥
三・四八	三・三三	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三
三・四八	三・三三	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三
三・四八	三・三三	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三
三・四八	三・三三	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三
三・四八	三・三三	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三
三・四八	三・三三	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三
三・四八	三・三三	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三
三・四八	三・三三	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三
三・四八	三・三三	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三
三・四八	三・三三	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三	三・四八	三・三三

各工場別月別一人當り主食食量表(單位合) (其二)

平均	T.S	M.	K.	H.	H.K	八月		九月		十月		十一月		十二月		平均	
						米	麥	計	米	麥	計	米	麥	計	米	麥	計
二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六
二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六
二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六
二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六
二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六
二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六
二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六
二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六
二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六
二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六	二・七九	二・八〇	二・八〇	二・八一	二・六六

即ち、歴述した本病發生の最も多い時期に向はむとするに於て其の食量量が減じ、又其の患者發生の數の減する頃に於て食量量が回復することを見る、故主食量の攝取量が少くなるといふことは、全體を通じて觀て本病の發生と密接な關係あるものと思はれる、殊に作業、生活狀態其の他は此の時期と雖も何等の變化のないことを基礎として考へ

れば、そこに食量量が本病發生の上に關係の保たるゝことは有力なる理由の一つとせられねばならぬと思ふ。

さて、斯様な關係の下に前述のH.T.S.工場を見ると、一年平均に於て工場の食量量が低い、T.S.工場は一年平均の量ばかりでは理由が一貫せぬことは既述の通りであるが、月別消長によつて見れば、其の最も食量量の減退する八月の比較に於て、各工場平均が最も高い一月のそれに比べると次のやうな結果を得らるゝのである。

K.	H.	H.K	一月		八月		差
			米	麥	計	米	
三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三
三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三
三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三
三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三
三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三
三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三
三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三
三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三
三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三	三・三三

即ち之れに依つて見れば、H工場及T.S.工場は、最高、最低の差が最も甚しく、殊にH工場が最も多いのを見る、之れに依つて、H工場にあつては、一年平均から見ても、亦本病發生最盛期と冬期との間の動搖の差に於ても、著明に食量量の動搖關係が明らかであつて、T.S.工場に於ては其の患者の發生時期に於て、食量量の著しき減退状態を示すのを見る、即ちH工場、及T.S.工場に於ては本病多發の理由の一部として、主食物の食量量の減退といふことが相當重要なものと考へられる、換言すれば主食物食量量の減退、即ち營養の減退は確かに本病發生の一部の理由となり得るものと考へられるやうに思ふ。

以上は主食物の分量的觀察であるが、更らに之れを其の主食物の熱量關係の方面から觀察すると、別表に之れを示す通りであつて、矢張りH工場、T.S.工場に於ては其の主食物の熱量に於て、一月と八月との間には、他の工場に比べて著明な差を示すのを見ることは次の表の示す所である。

差	月 月		H.K	H.	K.	M.	T.S
	八	一					
			二、〇三四・四〇	一、八九三・〇二	一、八七六・七五	一、八五三・六六	二、〇八一・六六
			一、六九四・一〇	一、四四五・一〇	一、六三二・三四	一、五七七・六六	一、五五〇・一八
			三四〇・三〇	四四七・九二	二四四・四一	二七六・〇〇	五三一・四八

各工場別月別一日一人當り主食物の養價表(單位グラム) (其 一)

均平	T.S		M.		K.		H.		H.K		蛋白質	脂質	糖質	熱量
	計	麥米	計	麥米	計	麥米	計	麥米	計	麥米				
	三〇・七六	一・一七	二八・七六	一・一七	二六・七六	一・一七	二四・七六	一・一七	二二・七六	一・一七	一八・七六	一・一七	一六・七六	一・一七
	二〇・〇〇	一・一〇	一八・〇〇	一・一〇	一六・〇〇	一・一〇	一四・〇〇	一・一〇	一二・〇〇	一・一〇	一〇・〇〇	一・一〇	八・〇〇	一・一〇
	一〇・〇〇	一・〇〇	八・〇〇	一・〇〇	六・〇〇	一・〇〇	四・〇〇	一・〇〇	二・〇〇	一・〇〇	〇・〇〇	一・〇〇	〇・〇〇	一・〇〇
	三〇・〇〇	一・〇〇	二八・〇〇	一・〇〇	二六・〇〇	一・〇〇	二四・〇〇	一・〇〇	二二・〇〇	一・〇〇	一八・〇〇	一・〇〇	一六・〇〇	一・〇〇
	二〇・〇〇	一・〇〇	一八・〇〇	一・〇〇	一六・〇〇	一・〇〇	一四・〇〇	一・〇〇	一二・〇〇	一・〇〇	一〇・〇〇	一・〇〇	八・〇〇	一・〇〇
	一〇・〇〇	一・〇〇	八・〇〇	一・〇〇	六・〇〇	一・〇〇	四・〇〇	一・〇〇	二・〇〇	一・〇〇	〇・〇〇	一・〇〇	〇・〇〇	一・〇〇
	三〇・〇〇	一・〇〇	二八・〇〇	一・〇〇	二六・〇〇	一・〇〇	二四・〇〇	一・〇〇	二二・〇〇	一・〇〇	一八・〇〇	一・〇〇	一六・〇〇	一・〇〇
	二〇・〇〇	一・〇〇	一八・〇〇	一・〇〇	一六・〇〇	一・〇〇	一四・〇〇	一・〇〇	一二・〇〇	一・〇〇	一〇・〇〇	一・〇〇	八・〇〇	一・〇〇
	一〇・〇〇	一・〇〇	八・〇〇	一・〇〇	六・〇〇	一・〇〇	四・〇〇	一・〇〇	二・〇〇	一・〇〇	〇・〇〇	一・〇〇	〇・〇〇	一・〇〇

均平	計		蛋白質	脂質	糖質	熱量
	計	麥米				
	三〇・七六	一・一七	二六・七六	一・一七	二四・七六	一・一七
	二〇・〇〇	一・一〇	一八・〇〇	一・一〇	一六・〇〇	一・一〇
	一〇・〇〇	一・〇〇	八・〇〇	一・〇〇	六・〇〇	一・〇〇
	三〇・〇〇	一・〇〇	二八・〇〇	一・〇〇	二六・〇〇	一・〇〇
	二〇・〇〇	一・〇〇	一八・〇〇	一・〇〇	一六・〇〇	一・〇〇
	一〇・〇〇	一・〇〇	八・〇〇	一・〇〇	六・〇〇	一・〇〇

各工場別月別一日一人當り主食物養價表(單位グラム) (其 二)

均平	S.T		M.		K.		H.		H.K		蛋白質	脂質	糖質	熱量
	計	麥米	計	麥米	計	麥米	計	麥米	計	麥米				
	三〇・七六	一・一七	二八・七六	一・一七	二六・七六	一・一七	二四・七六	一・一七	二二・七六	一・一七	一八・七六	一・一七	一六・七六	一・一七
	二〇・〇〇	一・一〇	一八・〇〇	一・一〇	一六・〇〇	一・一〇	一四・〇〇	一・一〇	一二・〇〇	一・一〇	一〇・〇〇	一・一〇	八・〇〇	一・一〇
	一〇・〇〇	一・〇〇	八・〇〇	一・〇〇	六・〇〇	一・〇〇	四・〇〇	一・〇〇	二・〇〇	一・〇〇	〇・〇〇	一・〇〇	〇・〇〇	一・〇〇
	三〇・〇〇	一・〇〇	二八・〇〇	一・〇〇	二六・〇〇	一・〇〇	二四・〇〇	一・〇〇	二二・〇〇	一・〇〇	一八・〇〇	一・〇〇	一六・〇〇	一・〇〇
	二〇・〇〇	一・〇〇	一八・〇〇	一・〇〇	一六・〇〇	一・〇〇	一四・〇〇	一・〇〇	一二・〇〇	一・〇〇	一〇・〇〇	一・〇〇	八・〇〇	一・〇〇
	一〇・〇〇	一・〇〇	八・〇〇	一・〇〇	六・〇〇	一・〇〇	四・〇〇	一・〇〇	二・〇〇	一・〇〇	〇・〇〇	一・〇〇	〇・〇〇	一・〇〇
	三〇・〇〇	一・〇〇	二八・〇〇	一・〇〇	二六・〇〇	一・〇〇	二四・〇〇	一・〇〇	二二・〇〇	一・〇〇	一八・〇〇	一・〇〇	一六・〇〇	一・〇〇
	二〇・〇〇	一・〇〇	一八・〇〇	一・〇〇	一六・〇〇	一・〇〇	一四・〇〇	一・〇〇	一二・〇〇	一・〇〇	一〇・〇〇	一・〇〇	八・〇〇	一・〇〇
	一〇・〇〇	一・〇〇	八・〇〇	一・〇〇	六・〇〇	一・〇〇	四・〇〇	一・〇〇	二・〇〇	一・〇〇	〇・〇〇	一・〇〇	〇・〇〇	一・〇〇

副食物に付て之れを見るに別表に示す通り、全般的に見て主食物とは異り夏季に於て其の熱量が稍々増加するのを見る、而し乍ら其の總平均に於て、T.S.工場は最も低き位置に置かれ、次にK.工場で之れと僅微の差を以てH.工場が置かれてある、そして副食物ばかりに付てはこれ以上特に特異の點を見出すことが出来ぬ。

全食物に付て之れを見るに、工場全體、一年平均總熱量は、二、〇五八・六一であつて、其の各工場別一年平均に依つて見れば、矢張りH.工場、及T.S.工場が最も低く、殊にH.工場の如きは其の平均熱量よりは低き位置に在ることは別表の示す通りである、そして全體を通じて八月總平均熱量が、一月のそれに比べて甚だ低き地位に在るばかりでなく、H.工場、T.S.工場に於ては殊に著しく低下するの狀は次に示す通りである。

各工場別月別一日一人當り副食物養價表(單位グラム) (其 一)

平均	T.S	M.	K.	H.	F.	一月 自二十一日至二十五日					三月 自十一日至十五日					六月 自六日至十日				
						總蛋 白質	動物 性蛋 白質	脂質	糖質	熱量	總蛋 白質	動物 性蛋 白質	脂質	糖質	熱量	總蛋 白質	動物 性蛋 白質	脂質	糖質	熱量
三〇・五二	二四・九三	三三・〇八	三三・四九	三三・九六	二七・二二	三三・〇一	二二・八四	三三・八四	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	
二二・六八	一〇・六六	一三・四一	一四・九六	一六・五一	一六・五一	二二・八四	一七・五〇	二二・八四	二二・八四	二二・八四	二二・八四	二二・八四	二二・八四	二二・八四	二二・八四	二二・八四	二二・八四	二二・八四	二二・八四	
九・〇三	五・七七	七・八六	七・〇〇	七・〇〇	七・〇〇	八・〇三	六・四九	八・〇三	八・〇三	八・〇三	八・〇三	八・〇三	八・〇三	八・〇三	八・〇三	八・〇三	八・〇三	八・〇三	八・〇三	
四二・四四	二二・七七	四六・九二	四七・二二	四七・二二	四七・二二	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	
三三・〇一	二二・八四	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	三三・〇一	

各工場別月別一日一人當り副食物養價表(單位グラム) (其 二)

平均	T.S	M.	K.	H.	K.	八月 自六日至十日					十一月 自一日至五日					平均				
						總蛋 白質	動物 性蛋 白質	脂質	糖質	熱量	總蛋 白質	動物 性蛋 白質	脂質	糖質	熱量	總蛋 白質	動物 性蛋 白質	脂質	糖質	熱量
三二・〇三	二六・六六	三六・七七	三六・七七	三六・七七	三六・七七	三二・〇三	二二・八四	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	
二二・六一	一〇・六六	一三・四一	一四・九六	一六・五一	一六・五一	二二・六一	一七・五〇	二二・六一	二二・六一	二二・六一	二二・六一	二二・六一	二二・六一	二二・六一	二二・六一	二二・六一	二二・六一	二二・六一	二二・六一	二二・六一
九・〇三	五・七七	七・八六	七・〇〇	七・〇〇	七・〇〇	九・〇三	六・四九	九・〇三	九・〇三	九・〇三	九・〇三	九・〇三	九・〇三	九・〇三	九・〇三	九・〇三	九・〇三	九・〇三	九・〇三	
四二・四四	二二・七七	四六・九二	四七・二二	四七・二二	四七・二二	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四
三二・〇三	二二・八四	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三

各工場別月別一日一人當り食物養價表(單位グラム) (其 一)

平均	T.S	M.	K.	H.	H.	一月					三月					六月				
						總蛋 白質	動物 性蛋 白質	脂質	糖質	熱量	總蛋 白質	動物 性蛋 白質	脂質	糖質	熱量	總蛋 白質	動物 性蛋 白質	脂質	糖質	熱量
七〇・五二	六六・三三	七三・〇三	七三・〇三	七三・〇三	七三・〇三	七〇・五二	六六・三三	七三・〇三	七三・〇三	七三・〇三	七〇・五二	六六・三三	七三・〇三	七三・〇三	七三・〇三	七〇・五二	六六・三三	七三・〇三	七三・〇三	七三・〇三
三三・六八	一〇・六六	一三・四一	一四・九六	一六・五一	一六・五一	三三・六八	一〇・六六	一三・四一	一四・九六	一六・五一	三三・六八	一〇・六六	一三・四一	一四・九六	一六・五一	三三・六八	一〇・六六	一三・四一	一四・九六	一六・五一
九・〇三	五・七七	七・八六	七・〇〇	七・〇〇	七・〇〇	九・〇三	五・七七	七・八六	七・〇〇	七・〇〇	九・〇三	五・七七	七・八六	七・〇〇	七・〇〇	九・〇三	五・七七	七・八六	七・〇〇	七・〇〇
四二・四四	二二・七七	四六・九二	四七・二二	四七・二二	四七・二二	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四	三三・八四
三二・〇三	二二・八四	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	二二・八四	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	二二・八四	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三	二二・八四	三二・〇三	三二・〇三	三二・〇三

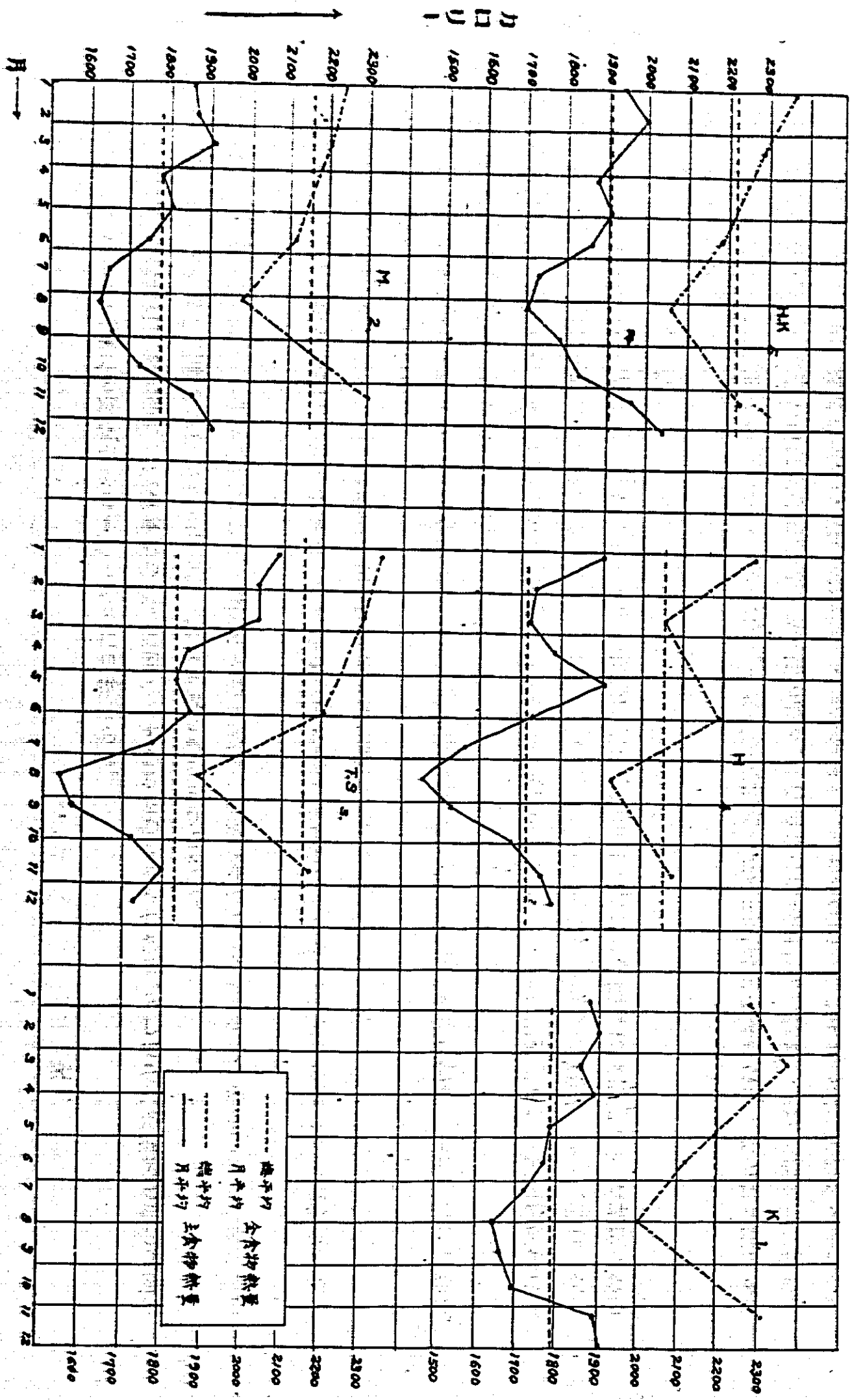
各工場別月別一日一人當り食物養價表(單位グラム) (其二)

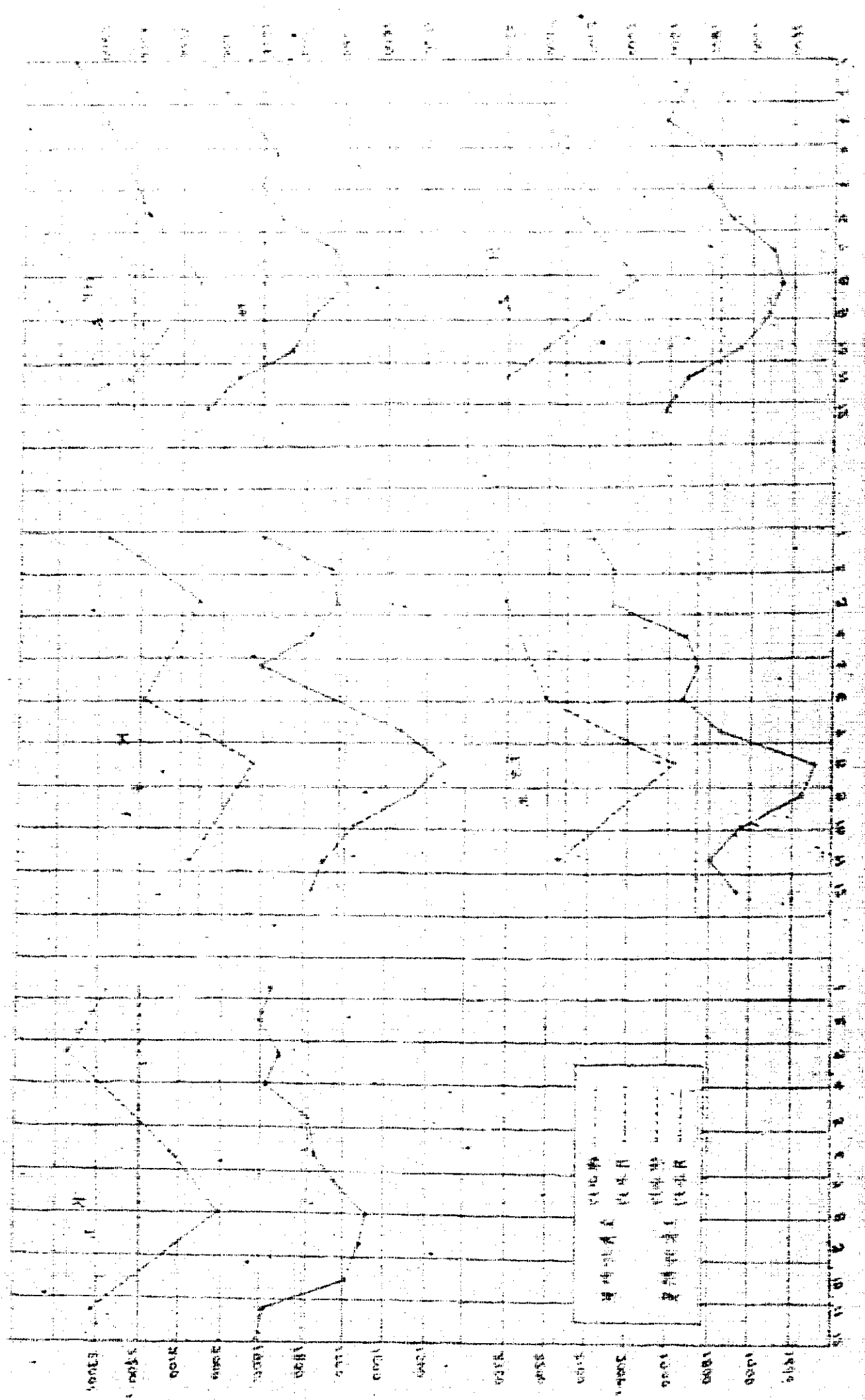
平均	八 月				十 月				一 月				平 均			
	白質	動物性蛋白質	脂質	糖質	熱量	白質	動物性蛋白質	脂質	糖質	熱量	白質	動物性蛋白質	脂質	糖質	熱量	
平均	六六・六六	二一・五五	八・六六	三九・三〇	一九九・九	六六・七二	二一・〇五	一〇・七〇	四九・六六	二二三・七六	六六・八八	二二・〇四	一〇・三〇	四三・六九	二〇五・九六	
T.S	六六・六六	二一・五五	八・六六	三九・三〇	一九九・九	六六・七二	二一・〇五	一〇・七〇	四九・六六	二二三・七六	六六・八八	二二・〇四	一〇・三〇	四三・六九	二〇五・九六	
H.K	六六・六六	二一・五五	八・六六	三九・三〇	一九九・九	六六・七二	二一・〇五	一〇・七〇	四九・六六	二二三・七六	六六・八八	二二・〇四	一〇・三〇	四三・六九	二〇五・九六	
M	六六・六六	二一・五五	八・六六	三九・三〇	一九九・九	六六・七二	二一・〇五	一〇・七〇	四九・六六	二二三・七六	六六・八八	二二・〇四	一〇・三〇	四三・六九	二〇五・九六	
H.K	六六・六六	二一・五五	八・六六	三九・三〇	一九九・九	六六・七二	二一・〇五	一〇・七〇	四九・六六	二二三・七六	六六・八八	二二・〇四	一〇・三〇	四三・六九	二〇五・九六	

差	一 月		八 月		H.K	H	K	M	T.S
	月	月	月	月					
差	二、三六七・三九	二、二七五・五九	二、二七五・五九	二、二四六・四四	H.K	H	K	M	T.S
	二、〇五一・七九	一、八二五・六〇	一、九九七・一五	一、九八一・四四					
	三、一五・六〇	四、四九・九九	二、八八・四四	二、六五・〇〇					
				四、六三・九七					

以上の事實を総合すると、主食物熱量の昇降關係は、全食物熱量の昇降關係と全く相一致することは圖表の示す通りであつて、何れも初夏の候より其の減退を始め、それが恰度本病の發生數を増す時季と全く相一致し、H工場、T.S工場に於ては特に著しき減差を示し、何れも六月初め頃より其の減退の狀を示すのであるが、圖表の示す通り全食物熱量の減退の波線の指示は、他の工場に比べてH工場、T.S工場に於て殊に急峻の狀を呈することは明らかに認めらるゝのである。

之れ等の理由の綜合に依つて、既述H工場、T.S工場の二工場が他の工場と同一要件の下に在りながら、患者を多發した所の理由と爲り得るものと思ふ。





故に、この工場間の食物攝取に關する關係を見れば、六月初旬頃から何れも食思の減退を起し比較的疲勞を示し、全食物殊に主食物に對する著明なる營養の比較的不足状態と爲り、殊に前述の各方面からの觀察の結果を綜合して其の不足状態の著名なるもの程脚氣病を多發するの狀に見て、夫れが原因的若くは誘因的理由の重要なる一部と爲り得るものと考へらるゝのである。

八、總括

上來の記述によつて推論すると工場なる密集生活を營む場所に於ける本病發生の狀態は大要次のやうな結果となる

- 一、全體を通じて患者發生比は中等學校のそれ(一・六三)と略々似たる一・七九%を示し多少高率であるが、特に衛生上必要な注意を拂はれたるものに在りては、其の率が甚だしく減ずるのを見る、そして對照的に觀て鑛山勞働者に於ては甚だ高き發生率を示すの事實を見る。

- 一、發生日次は他の場合と略々同様であつて、四月頃より漸次發生數を増し六月から愈々其の數多く七月、八月に於て最も多く發生するやうである。
- 一、年齢に於ては十八歳位から二十歳前後に於て最も多く發生罹病す。
- 一、寄宿せる者と通勤せる者との間の關係は、中等學校のそれと同様で寄宿せる者は通勤せる者よりも發病罹病者多し。
- 一、入社後發病期間は矢張り中等學校に於ける寄宿生と略々同様の狀況に在つて、入社後半年以内に已に發生罹病する者最も多く、永き年の經過の後に發病するものゝ數は少數であるやうである。
- 一、氣象學的影響殊に溫度湿度の高低は本病の發生に與つて力あるものゝやうである、そしてそれが疲勞を起し食思の減退を起すことに重要な關係があるものゝやうに思惟せらる。

一、疲勞、食思の減退に依る全食物の攝取量減退主食物攝取量の減退は其の疲勞をして益々強からしめ、營養の比較的
 一時的不良状態を起し、其の度の強弱消長、動搖状態は本病の發生罹病と密接な關係が保たれるものと考へられる。
 今試みに、既述の諸項に現はれたる密集生活状態に在る者に於ける、本病の發生比率及其の他を比較すれば左の通り
 である。

脚氣病患者發生比率 (百分比)

一般住民	農	村	〇・八五
漁	村	〇・七三	
牛農、牛商	工場	一・五〇	
中等學生	通	宿	一・三七
寄	宿	三・四三	
工	場	一・七九	
特別ナル施設ヲ	通	〇・四二	
有スル工場	寄	〇・五六	
陸	軍	大正十三年	一・〇七
海	軍	大正十三年	〇・四二
鑛	山	大正十二年	二・四四
文部省直轄學校	大正十年	〇・四九	
刑務所	大正十二年	〇・九二	

第五章 乳兒脚氣及母體脚氣

一、乳兒脚氣に對する一般的觀察

一、年 別

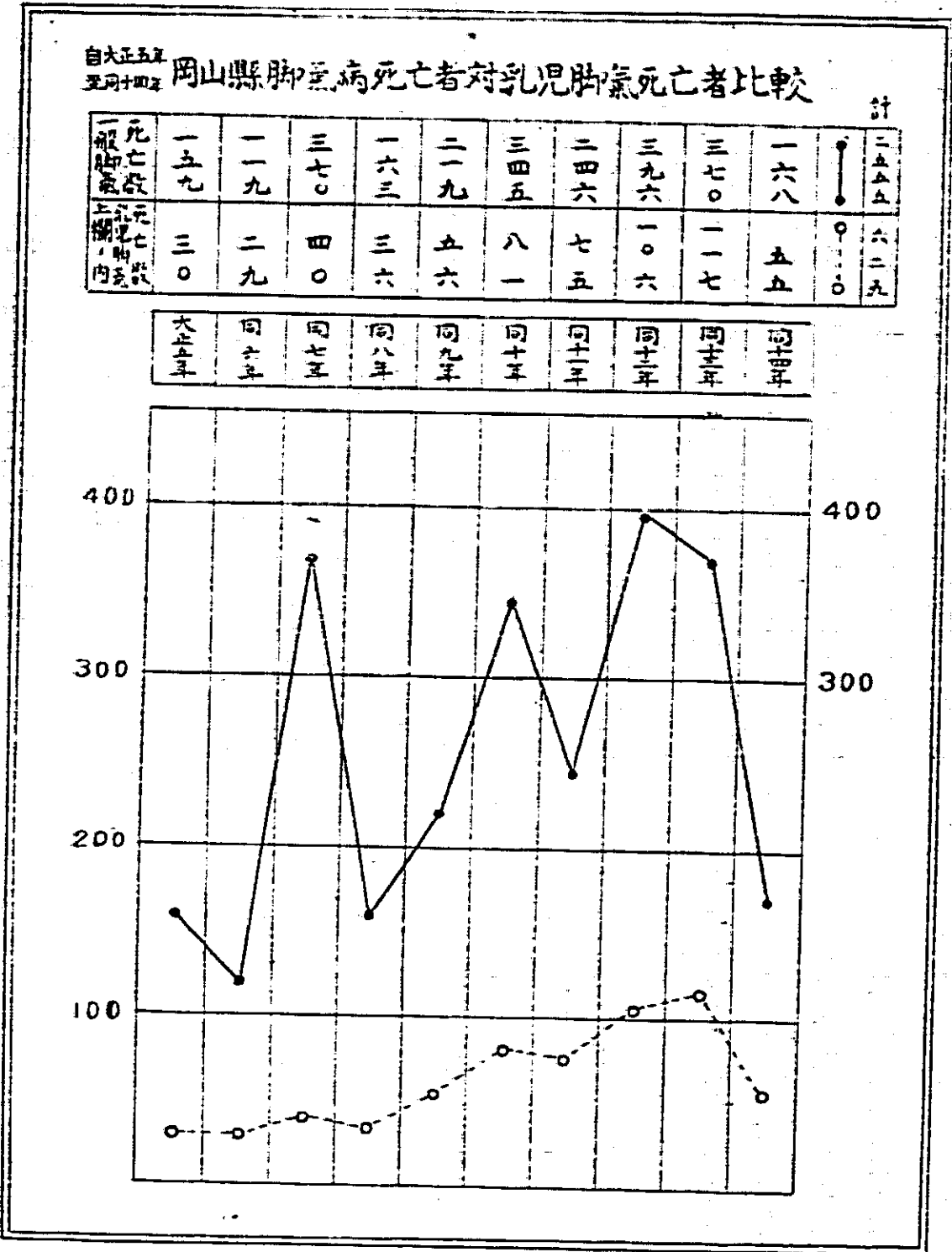
各年別による觀察に於て、別表に示す通り其の示線の狀が成人の脚氣病と略々平行して走るのを見る、即ち一般脚氣
 病の消長と乳兒脚氣と軌を一にして増減するものと見ることが出来る、成人、脚氣病を含む一般脚氣病の多き年に當つ
 ては矢張り乳兒脚氣の發生を多きものと見ることが出来ることとなる。

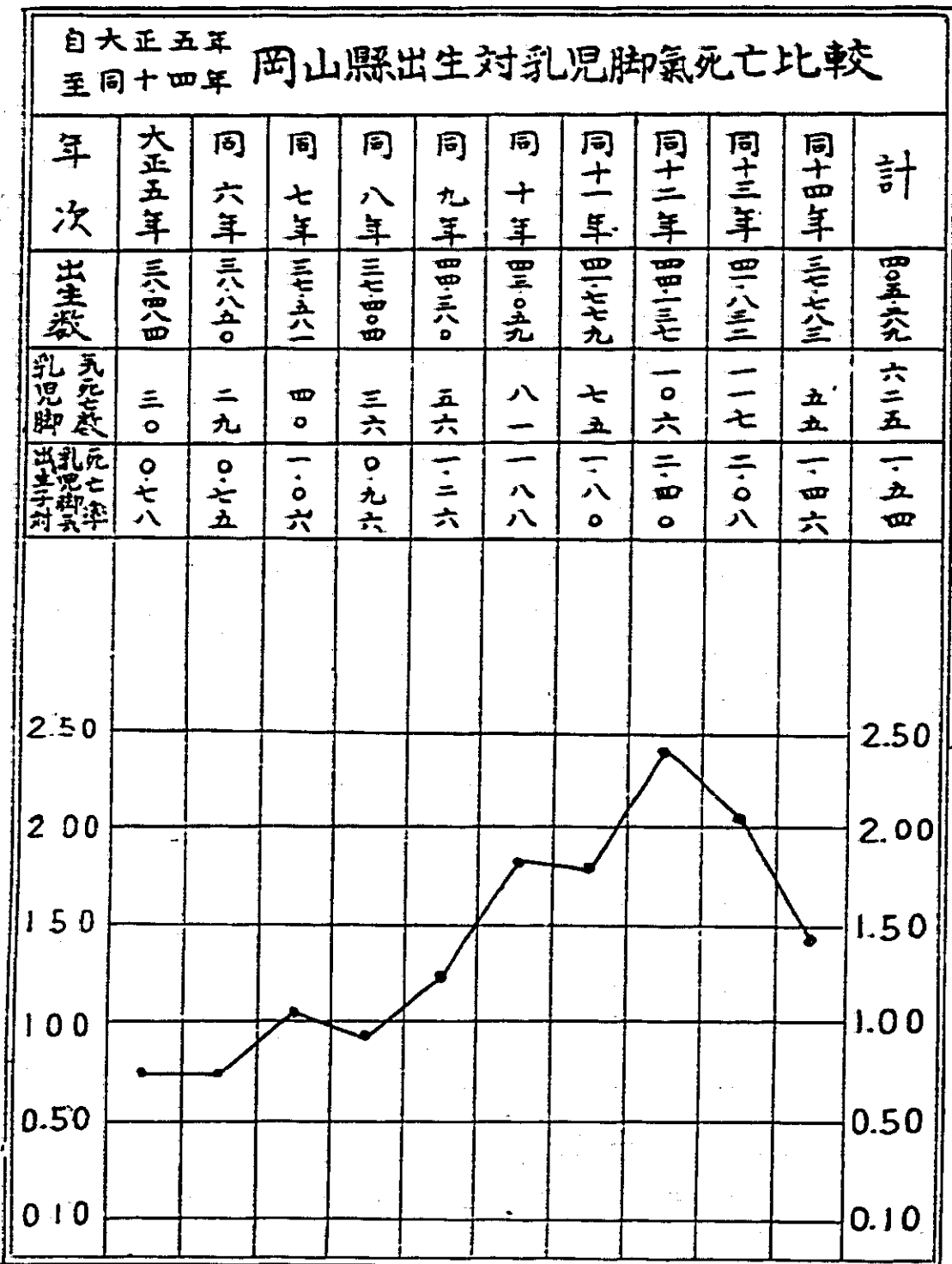
之に依つて見れば、大正七年に於ては甚しき其の數の昇騰を示し、同八年に於て減數し、九年十年に於て再び多數を
 示し十一年に於て稍々減數し十二年、十三年に於て異常の發生を示してゐる、之を全國的に見れば次表の通り、全く本
 縣のそれと同一型を呈するのを見る、即ち大正七年に於て多發し、八年に於て減じ、十年に於て高く、十一年に減じ、
 十二年に於て異常の増加を示す點に於て全く相一致する、之を生産に對して比較するに、別表に示す通り大正五年に於
 て其の千分比が、〇・七八であつたものが、一張一弛漸次其の率を高め、大正十二年の如きは其の最高を示し、二・四〇
 となり、大正十三年、同十四年と稍々下向の狀を呈してゐる。

之れを全國生産對本病乳兒死亡千分比と本縣に於けるそれと比ぶれば、全の符節を合する狀を呈するのを見るばかり
 でなく、全國の狀に於ては其の明治三十二年以來の數は中途に於て變化はあるが大體に於て漸次其の死亡比を高め、明
 治三十二年より十ヶ年を経たる明治四十一年に於ては其の生産對千分比に付き約五倍の増加を示し、それより十五年を
 經たる大正十二年に於ては明治四十一年に比し約三倍半の増加を示し、其の明治三十二年に比べては實に約十六倍の多
 數に達し而かも漸次其の示線が増加の狀を呈するに見れば、甚だ寒心に堪へざるものと思はれる。

明治三十二年 同三十三 同三十四 同三十五 同三十六 同三十七 同三十八 同三十九 同四十 同四十一 同四十二 同四十三 同四十四	脚氣死亡中乳兒脚氣			脚氣死亡中乳兒脚氣		
	男	女	計	男	女	計
(一九〇〇)	二五七	二二一	四七八	七八一	七〇九	一、四九〇
(一九〇一)	二八九	二五五	五四四	九七〇	八九八	一、八六八
(一九〇二)	四四二	三七五	八一七	一、六八三	一、五六七	三、二五〇
(一九〇三)	七二六	六五八	一、三八四	二、一〇六	一、九一九	四、〇二五
(一九〇四)	九三二	八三二	一、七六四	三、一六五	二、八九〇	六、〇五五
(一九〇五)	九二六	七三〇	一、六五六	二、八二一	二、六五三	五、四七四
(一九〇六)	一、一三四	九九五	二、一二九	三、五七六	三、二〇三	六、七七九
(一九〇七)	八六六	八〇〇	一、六六六	二、一六二	一、九三五	四、〇九七
(一九〇八)	一、一三三	一、〇二五	二、一五八	三、一一五	二、七四一	五、八五六
(一九〇九)	一、四二〇	一、二八六	二、七〇六	四、七六一	四、二九六	九、〇五七
(一九一〇)	二、一五六	一、九六三	四、一八九	四、三三一	三、八七五	八、二〇六
(一九一一)	一、六六一	一、五二一	三、一八二	五、九一七	五、四五六	一一、三七三
(一九一二)	一、四七七	一、三六一	二、八三八	同	同	同

累年脚氣死亡中乳兒脚氣死亡 (全國)





累年脚氣死亡比例 (内務省衛生局)

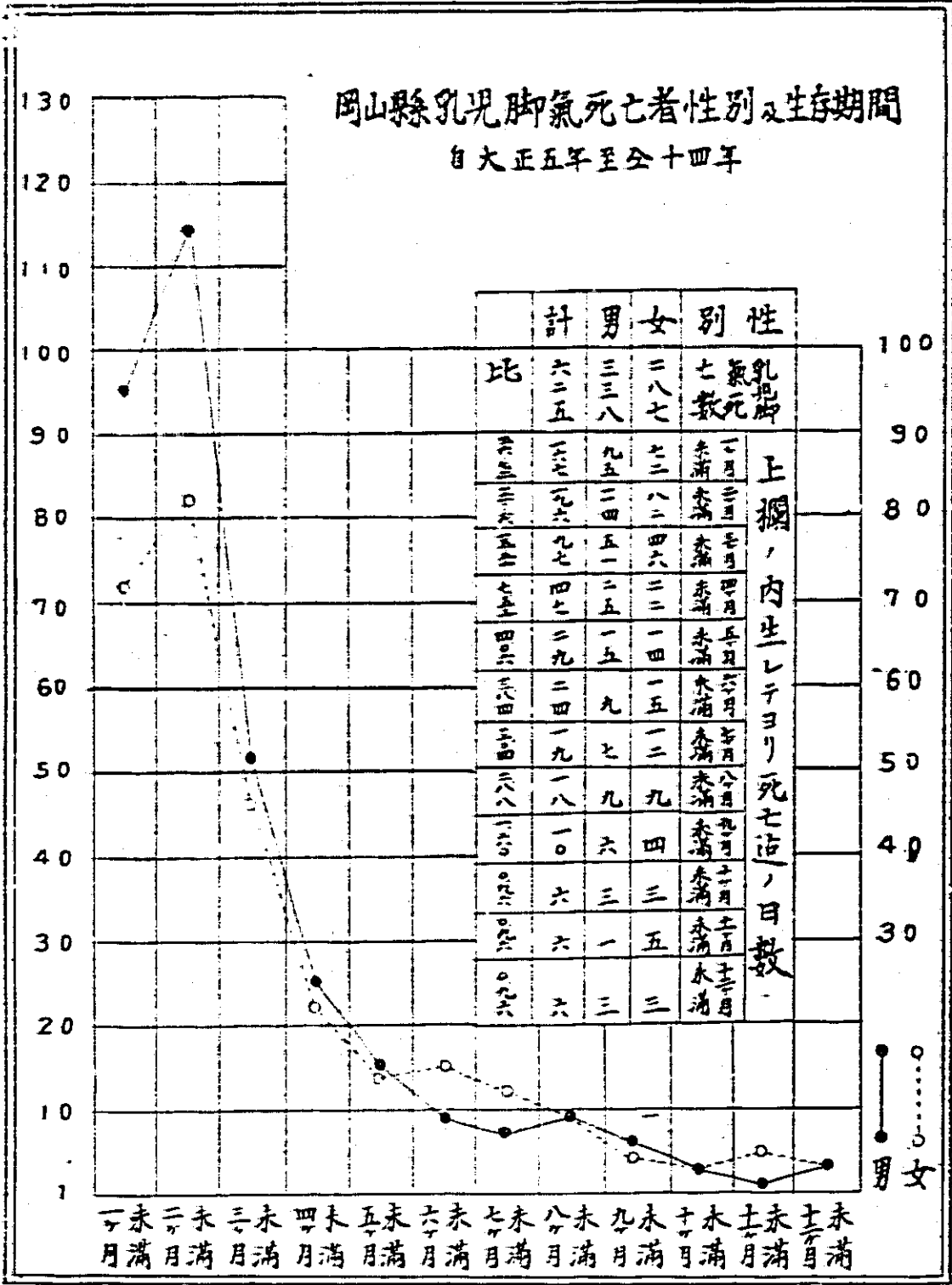
全 國	各性生産千ニ付乳児脚氣死亡			全 國	各性生産千ニ付乳児脚氣死亡		
	男	女	計		男	女	計
明治三十二年(一九一九)	〇・三六	〇・三三	〇・三四	大正十四年(一九二五)	〇・八八	〇・八三	〇・八六
同三十三年(一九〇〇)	〇・四〇	〇・三七	〇・三八	同十五年(一九二六)	一・〇八	一・〇四	一・〇六
同三十四年(一九〇一)	〇・五七	〇・五一	〇・五四	同十六年(一九二七)	一・八二	一・七八	一・八〇
同三十五年(一九〇二)	〇・九四	〇・八九	〇・九二	同十七年(一九二八)	二・二九	二・一八	二・二四
同三十六年(一九〇三)	一・二二	一・一五	一・一八	同十八年(一九二九)	三・四四	三・二七	三・三五
同三十七年(一九〇四)	一・二五	一・〇四	一・一五	同十九年(一九三〇)	三・〇五	二・九九	三・〇二
同三十八年(一九〇五)	一・五四	一・三九	一・四七	同二十年(一九三一)	三・九一	三・六五	三・七八
同三十九年(一九〇六)	一・一九	一・二〇	一・一九	同二十一年(一九三二)	三・〇一	二・二三	二・三〇
同四十年(一九〇七)	一・三八	一・二九	一・三四	同二十二年(一九三三)	四・六八	四・四一	四・五五
同四十一年(一九〇八)	一・六七	一・五八	一・六三	同二十三年(一九三四)	四・三一	四・〇一	四・一七
同四十二年(一九〇九)	二・五〇	二・三七	二・四三	同二十四年(一九三五)	五・六七	五・四六	五・五七
同四十三年(一九一〇)	一・九〇	一・八一	一・八六	同二十五年(一九三六)			
同四十四年(一九一一)	一・六六	一・五九	一・六二	同二十六年(一九三七)			

二、死亡月齡及性別

生後滿一年以内の乳児脚氣死亡者に付き、其の脚氣病死の時を観ると、次表に示す通りで、生後二ヶ月の者最も多數を占め全數の、三二・三六%を示し、次で生後一ヶ月以内のもので、二六・七二%を示すのを見る、即ち乳児脚氣の本縣

内最近十ヶ年間死亡の状は、生後一、二ヶ月以内に死の轉歸をとりたる者が最も多數であることを看る、そして年數の重なるに従つて漸次其の比を減じ、十ヶ月から滿一ヶ年に近づき最も其の數を減じてゐるのを見ることは從來唱へられた處と全く一致するのを見る。

性別に付て見れば、男三三八人に對し女二八七人であつて、其の比は男五四・〇八、女四五・九二を示し、男子は女子に比べて多數ではあるが、其の青年期に於ける如く何倍といふ如き差を示さないことは他の項に於て述ぶる通りである。



二、實地調査

乳兒脚氣に付き各方面の觀察を下す爲め、主として大正十四年中及び之れに大正十五年の中の一部を加へ、縣下の各々事情を異にする地方の、乳兒死亡者五十人に付き調査を試みた結果は次の通りである。

一、月別

乳兒脚氣死亡者五十人に付き調査した其の死亡月別觀察に於て、次表に示す通り、十月に於て最も多數で九月之れに次ぎ、十一月、八月と順次其の數を減する、のを見る之れを一般の脚氣病の其の消長の狀に對比すれば、一般成人の脚氣病に於ては九月、最も多數の死者を出し、十月之れに次ぎ、八月、十一月と順次減するのを見る、即ち其の最も多數の月の比較に於て、乳兒脚氣に在りては十月で成人脚氣に在りては九月といふ差はあるが、之れは近接せる兩月間示日の僅微の差を嚴にしたためであつて、九月、十月に於て最も多く八月、十一月之れに次ぐことに於て相似たるものと思はれる。

二、性別

性別に依る觀察に於て、別表に示す通り全數五〇人中男二八、女二二で、其の比は五六・〇〇に對する四四・〇〇であつて矢張既述の通り男子の方は女子に比べて多數であるが、其の較差は成人のそれに比べて低いことの點に於て一致するのを見る。

三、生存月齡

生存月齡により之れを觀察すると次表の通り、生後二ヶ月の者最も多數で、二二人即ち全體の約半數弱を示し、一ヶ月以内の者之れに次ぎ三ヶ月の者之れに次ぎ、他に甚だしき少數なることを示すの狀は、恰度前述本縣過去十ヶ年間脚

氣病死亡者月數順位と、全く相一致することを見るばかりでなく、他の方面の調査の結果とも略々一致することとなる。

乳兒脚氣死亡者月別調査表

死亡年次	性別	死亡月												計	
		一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月		
生後一ヶ月	男	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	男	3
生後一ヶ月	女	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	女	6
二ヶ月	男					1	1	1	1	1	1	1	1	男	7
二ヶ月	女					1	1	1	1	1	1	1	1	女	7
三ヶ月	男								1	1	1	1	1	男	5
三ヶ月	女								1	1	1	1	1	女	5
四ヶ月	男												1	男	1
四ヶ月	女												1	女	1
五ヶ月	男													男	0
五ヶ月	女													女	0
六ヶ月	男													男	0
六ヶ月	女													女	0
七ヶ月	男													男	0
七ヶ月	女													女	0
八ヶ月	男													男	0
八ヶ月	女													女	0
九ヶ月	男													男	0
九ヶ月	女													女	0
一十年	男													男	0
一十年	女													女	0
十一年	男													男	0
十一年	女													女	0
十二年	男													男	0
十二年	女													女	0
計	男	3	1	1	1	5	5	7	5	3	3	3	3	男	36
計	女	6	1	1	1	5	5	7	5	3	3	3	3	女	62

計	二ヶ年		計	死亡ノ月																	
	同十四年	同十五年		大正十四年		十五年		一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	男	女
同十五	同十四	同十五年	同十四	同十五年																	
					三	三													一		
					二	一															
					一	一															
					一	一															
					二	一															
					二	三															
					三	三															
					三	二															
					六	一															
					一〇	四															
					三	三															
					七	四															
					一	一															
					三〇	三〇															
					五〇	五〇															

以上の成績に依つて本縣下に於ける乳兒脚氣死亡の消長の状を見るに其の發生時に於て、一般成人の脚氣病の消長と相伴ひ、概観的に見て其の因て來る所、成人の脚氣病に負ふ所が甚大であることを思はしむることが出来る。

斯様な點から見て乳兒脚氣の成人の脚氣病との間に、そこに何等か有力な關係の保たるゝにあらざるやといふことを知ることは、又乳兒脚氣の觀察上必要な事項であると考へる。

三、乳兒脚氣と母體脚氣との關係に就て

元來、乳兒脚氣に就ては其の原因、人乳栄養によりて哺育せらるゝ乳兒に起る疾病であるとせられた、即ち其の供給する人乳の持主に脚氣病の存在するときに起るものであることは諸家の所説が一致してゐるやうであるが、其の輕重又は罹患の狀に付ては諸家の説く所多少の議論に相違した點がないでもない、こゝには全體の觀察上其の主なるもの付き主要點を摘録すれば次のやうである。

母の脚氣病が直接乳兒脚氣を起すことは明らかであつて、乳兒脚氣を起したる場合、その斷乳に依つて症狀を輕快せしむることを得るとは諸家の説が、之を中心として動かさるものと見ることが出来る、然し乍ら母の脚氣病症狀の輕重乳兒に現はるゝ症狀の程度とは必ずしも一致するものではなくして、母體脚氣病の重症なる場合、却つて乳兒脚氣の輕症なることがあり、或は乳兒脚氣の著明なる變狀を呈する場合、未だ母體に脚氣病症狀の出現を認めざることすらある等、この中間を走る、異りたる種々の場合があるものと見ることが出来る、そして其の原因の主なるものとしての、一種の脚氣毒なるものゝ存在を認め、これが母體から乳兒に移行して一種の中毒症狀として乳兒脚氣を起すものであらうとの説をなした人も少なくないやうである、然し、前述の通り其の母體と乳兒との間に於ける脚氣病症狀の發現には、種々なる異なつた程度の差違がある所から見ても、決してこの説ばかりでは説明し終ることは困難であると思はるゝ點がある。

大人に來る脚氣病を一種の傳染病なりとして其の母體の血液中に一種の毒素を形成し、乳汁と共に乳兒に移行し中毒を起すものである、即ち大人脚氣は傳染病であつて乳兒脚氣は一種の中毒症であるといふ、即ち傳染病説を主張した向もある。

或る人は又乳兒脚氣と授乳婦脚氣とは相離るべからざる關係あるものとし、脚氣授乳婦に對し米食を禁ずれば乳兒の脚氣症狀は輕減することを得るとした、それに賛成する多くの人は白米病と乳兒脚氣とは稍々同一であるとし、之れが治療に對しても母乳減廢に對し玄米粥を用ふるを可としたのである。

又「ネツスル、ミルクフード」、鷲印「コンデンスミルク」中に、「ビタミンBの缺乏せることを確かめた後、定型的乳兒脚氣に母乳を廢し、「ネツスル、ミルクフード」を與へたところが、何れも症狀が輕快した、然れ共一、二週間持続後再び嘔心症狀を起し、遂には著明に穀粉栄養障礙に酷似した症乳を呈したことがある、「ミルクフード」に「オリザニン」を加へて與ふると症狀が急速に輕快する、乳兒脚氣に脚氣乳を與へつゝ「オリザニン」を與へて亦同じであるとし

た、然し健康人乳に比べて甚だしく治療的效果少なしと説いてゐる學者もある。

其他の數氏も亦乳兒脚氣を起したる時、母乳を制限せず、唯之に多量の「オリザニン」を與ふることによつて徐々ではあるが確實に治癒せしむることを得たといふ。

之に依つて尙進んで其の經驗を基礎とし、乳兒脚氣を起したる場合母に多量の糖製劑を與へれば乳兒には少量で可なりとする人があるやうになつた。

要するに脚氣病の原因、に關する諸家の所説の當否は別として、兎に角授乳婦に脚氣症狀ある場合には乳兒に脚氣病を起すものと見るを至當とするが、其の兩者間に於ける症狀の輕重の差は必ずしも相一致するものでない、且つ其の症狀の發現が臨床上認識さるゝ程度に於て兩者正比例するものとはばかり見ることは出来ぬ、そして其の一部の因て來る事由の一つとして、其の兩者又は其の一方に於ける「ビタミンB」の缺乏も又原因の主なる部分として數ふべきものであるとの觀察を下すことが出来る。

或る人々は多數の患母に付き、授乳を其の儘として之に「オリザニン」を添加して相當の良經過を得たが、斷乳又は牛乳を與へたときのやうに、遂かに良效を收むることは困難であつたと謂ふ。

又或る人は母體の榮養としては麥飯を推奨し、「ビタミンB」の缺乏を避け、便秘せざることに努め、「オリザニン」又は「アンチペリペリン」の大量を服用せしむることを推奨した。

之れを要するに諸家の説を綜合すると、乳兒脚氣の由て來ることは、母乳に「ビタミンB」の缺乏せることも一因たるには相違ないが、又乳兒の消化器の官能の未だ充分なる發達を遂げない爲めを以て、自體内消化管に於て「ビタミンB」を起し易き事情に觸れ易きことも亦其の一因と認むることが出来ると云ふやうである。

乳兒脚氣が母體脚氣と密接なる關係を保つ點に付きては已に諸家の示數的發表に於ても明らかであるが、猶之れを如

實に示す資料として諸府縣(群馬縣、長野縣、三重縣、鳥取縣、島根縣、香川縣、大分縣、熊本縣、宮崎縣、佐賀縣の十縣)の最近十ヶ年間の調査せられた所の成績に依れば、大正五年より同十四年に至る十ヶ年間醫師の診斷を受け乳兒脚氣と診定せられたるもの、總數は乳兒脚氣總患者四九・三九二、同上中死者九三六であつて(この數は實數としては稱少數の感がないでもないが、醫師が始めから乳兒脚氣として取扱つた實數並に其の中の死亡數であつて、各縣に於て特に取り調べられたるものを其のまゝ掲げたのである、それを其の實數の多少は別として其の診療者數と死亡數、及其他哺育關係を知る爲めに之れを掲出したのである)之れに由て見れば其の死亡率は一八・一四%に相當し、別項記述の成人の脚氣病推算死亡率、一・四三乃至一・九三に比べて約十倍に近き率を示すこととなる、其の乳兒脚氣病者に付き母乳に依るものは八四・一%の多數を占め其の死者に於て矢張り母乳に依るもの、七八・五三%を示し最も多數であることは別表に示す通りであつて、母乳に依るものが如何に乳兒脚氣を起し又之れに依る死者を出すことと多きかを窺ふことが出来る、そして其他の榮養に依るものは示表の通り極めて少數で、殆んど比較とするに足らぬ位で、母體又は哺乳と密接の關係の保たるゝことは争はれぬ事實と考へられる、そして又此の間の關係が如何に動くかといふことは乳兒脚氣豫防上重要な意義を有することと思惟せらるゝのである。

乳兒脚氣調査表 (十縣)

年	大正五年		大正六年		大正七年		大正八年		大正九年		大正十年		大正十一年		大正十二年		大正十三年		大正十四年	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
母乳	生	207	166	213	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
	死	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37
牛乳	生	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21
	死	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
乳母	生	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	死	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
ミク	生	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	死	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
ラクト	生	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	死	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
穀粉	生	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	死	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
重湯	生	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	死	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
母乳	生	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	死	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
混合	生	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	死	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
不明	生	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	死	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

年	大正六年		同七年		同八年		同九年		同十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
母乳	生	173	143	131	107	107	117	127	137	147	157	167	177	187	197	207	217	227
	亡	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27
牛乳	生	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19
	亡	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
母乳	生	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24
	亡	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
ミルク	生	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
	亡	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
ラクト	生	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	亡	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
粉重湯	生	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7
	亡	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
母乳	生	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
	亡	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
粉重湯	生	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	亡	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
混合	生	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	亡	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
不明	生	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	亡	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
合計	生	185	155	143	117	117	127	137	147	157	167	177	187	197	207	217	227	237
合計	亡	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27

百分死亡比	計		合計
	女	男	
母乳	21.8	21.8	21.8
牛乳	2.1	2.1	2.1
母乳	24.4	24.4	24.4
ミルク	3.7	3.7	3.7
ラクト	1.1	1.1	1.1
粉重湯	7.9	7.9	7.9
母乳	2.2	2.2	2.2
粉重湯	1.1	1.1	1.1
混合	1.1	1.1	1.1
不明	6.2	6.2	6.2

四、乳兒脚氣死亡者を出だせる家庭に對しての調査

乳兒脚氣の罹病は其の本人の生活状態其他を切り放ちて研究を遂ぐることは困難の業であつて、殊に母體の脚氣病とは離るべからざる關係を持ち、殆んど全く家庭的事情の支配を受くるものと見ることが出来る、故にこゝには其の家庭方面から、殊に母體の方面から本病に對する觀察を下して見やうと思ふ。

一、母體に於ける一般要約

母體の脚氣病が乳兒脚氣と密接なる關係あるものであることは諸家の説く所既述の通りであるが、尙茲には第一に其の母體脚氣と乳兒脚氣との間に如何なる程度の關係が保たれつゝあるかを觀察することとした。

1. 母體脚氣病發病回数との關係

既述の方法に依る乳兒脚氣五十例に付き、これを調査すると次表に示す通りで、乳兒の生存中に於て母體に脚氣症を認めたるもの三九例、其の之れの發現を認めざる者一例である、そして其の三九例中、脚氣症の發現を認めたるものが第一回であつて、乳兒も共に脚氣症を呈したるもの二六例であつて其の大部分を占め、二回發病して同一の結果を招來したるもの三例、同じく三回のもの五例で、四回、五回、各二例回数不明のもの一例で、僅かに脚氣症を發見

